

## 第6回全国健康むら21 ネット大会イン大阪の報告

去る4月23日（土）、大阪リバーサイドホテル大ホール（270名）に於いて行われた大会レポート

全国健康むら21 ネット世話人 大杉幸毅

今年で6回目になる全国大会イン大阪。毎年少しずつではあるが着実に意識改革と具体化の実績を重ねてきている。

午前8時45分会場にスタッフが全員集合、点呼、作業手順打ち合わせ後、各パートに分かれ、あわただしく準備が始まった。10時の開会の頃には熱心な参加者でほぼ満席状態。冒頭、東日本大震災で亡くなられた方のご冥福を祈って黙とう。

### 小山 登代表 あいさつ

故甲田光雄先生（日本総合医学会元会長）と生前、「医療、教育、農業は国家が保障しなければならない。」と言ったことを話し合い、その具体化として健康むら運動が始まったことを紹介し、「産業革命以来20世紀は大量生産、大量消費の文明。宇宙にまでごみを捨てている。日本の戦後の経済復興は素晴らしいが、経済優先になってしまった。21世紀は本来の人と環境のあるべき姿を考える時代である。甲田思想の『少食は地球を救う、世界を救う』を実践していこう。地球上には飢餓の人が沢山いる。世界の实情は、やがて地球人口は90億人になり、食糧問題が来る。そんな時、3月11日、未曾有の大津波と原発事故が起こった。『二度とチェリノブイリを繰り返してはいけない』と言ってきたのに、これは天災ではなく、人災である。我々は好き放題に生きてしまった。国家総動員で解決、復興しなければいけない。21世紀に、いかにしたら地球は存在しているか、正に問われているのである。」

### 甲田先生の偉大な引力で多くの人材が集まった

全国健康むらとネット関係にある島根県雲南市は、中国山地の日本海側にある自然豊かな山村で、古代出雲族の剣が大量に発見されたことで話題になった遺跡がある。市民の健康づくりを行政が主導している速水市長のあいさつ。そこにある「食の杜」は、甲田先生の友人佐藤忠吉氏が作った一つの理想的な「健康むら」の具体化である。佐藤氏のご高齢（93歳）ながら毎年参加され、「食の杜」は意欲的に未だに進化中である。昨年はわが健康むらの会員が大阪から移住し、「降りていく生き方」を実践している。

続いて、同じく甲田先生の友人で顧問の佐藤喜作氏（日本有機農業研究会理事長）のあいさつ。「健康とは体の60兆の細胞社会の平和である。農業がいつの間にか戦いの農業になってしまった。戦いのない農業が有機農業である。全てが平和であるように、皆が健康で、全国に仲間を増やしていきましょう。」

## 基調講演「いのちと食・農の未来」

保田茂氏（神戸大学名誉教授・兵庫県農漁村研究所所長）は全国健康むらとネット関係にある兵庫県豊岡市の健康むらのリーダーであり、コウノトリの野生化推進協議会の指導者。コウノトリが住める環境が人間も安全に住める環境であるとの立場から、田んぼの農薬散布を減らす環境創造型農業を普及実践活動をされている。多くの教え子が行政、研究、実践の場で活躍され、幅広い人脈で行政をも巻き込んだ運動を展開されている。「TPP には反対だが、空念仏では実効性がない。かつて、ウルグアイラウンドの農産物自由化に反対した仲間が、ビラ配りの後、喫茶店に入って「モーニング」（厚切り食パンと珈琲が付いた朝のサービスメニュー）を食べているのを見て、これではだめだと感じた。朝食にパンを食べている日本人は約 5 割。そのパンの原料はアメリカ産小麦。こんな生活をしていながら反対を言って意味がありますか？反対ならどうして国産のお米や農産物を食べないのか。」保田氏はキッチンカーの逆バージョンを行っている。かまどを持って保育所を回り、ご飯が炊きあがるまでにお米の話をして、炊きたての美味しいご飯を食べてもらい、園児に「感動と納得」をさせ、「ご飯復活運動」を展開中。かつて世界中で経験したことのない超高齢化社会を日本だけが迎えようとしている今、私たちはどのような暮らしをすればいいのかを問われた。

甲田先生の教えを臨床に実践されている山口康三医師（回生眼科院長、日本総合医学会副会長）の講演は、目から見た健康のお話。目は全身の健康状態を現し、心身ともに健康になるにはどのような生活をすればいいのかを具体的にお話しされ、重篤な目の疾患の患者も生活改善によって治った症例を紹介された。

午後の第二部は須永隆夫氏（木戸クリニック所長・医師）は「操体法を日常生活に生かそうよ」と題されて講演。

### パネルディスカッション

保田氏に昇 幹夫氏（元気で長生き研究所所長・医師）、松川一人氏（里山自然農法協会代表）、森 美智代氏（森鍼灸院院長・鍼灸師）が加わり、小山代表がコーディネーターを務め、熱心に意見が発表され会場は盛り上がった。

最後に「原発を中止し、原発のいない社会・暮らし・生き方をしよう。」と大会宣言が読み上げられた。

### 第 3 部交流会

午後 6 時から会場を移し、活動報告、原発問題、TPP などの問題を中心に参加者約 70 名が熱心に意見交換を行った。

つちだ たかし  
槌田 劭氏のメッセージ

消費者が生産者を買支える提携運動のさきがけの「使い捨て時代を考える会」のリーダー槌田氏のメッセージの要約を紹介する。

「3月11日は日本社会に激震、激変をもたらしました。もの豊かな暮らしは崩れ始めました。生活の文化、意識が大きく変わることが求められ、お金に振り回されない、簡素な暮らしに向かうでしょう。放射能で高濃度汚染を引き起こしてしまった現実の中で、私たちは何をすべきか問われています。健康が第一です。健康を維持するには脱原発、脱公害の力を強め、良質な食材を生産する有機農業を広げることです。そして助け合い、励ましあって生きる共生の社会を目指すことです。」

大会の翌24日午前は、小林美喜子世話人が中心になって須永先生が指導された操体法講習会、午後は小山代表が社長を務める高知県のアンテナショップ「とさ千里」（「千里中央」）で「わくわく交流会」が行われ、旬のカツオのタタキや珍しい土佐の郷土料理、特産の栗焼酎などで和やかに意見交換が行われた。